



医者のスキル

最近の医者には話術が求められるようになってきている。

言葉の力で健康によい影響を及ぼすためだ。

私が医者を志すことを決めたのは、中学生のときだった。しょっちゅう風邪を引いたり眠れなかったり、何かと体調を崩しがちだった母親が、病院を変えてから少しずつ元気になっていったのだ。

肌合った薬でも出してもらっているのかな。

そう思い、あるとき私は母親に尋ねた。

すると、母親は首を横にふった。

「先生とお話ししてるだけよ」

「話って、カウンセリング？」

「うーん、それも兼ねてるのかもしれないけど……ほとんどは世間話に近いかな」

「薬は？」

「あそこに行くようになってからは飲まないようになったなあ」

最初は、本当だろうかと疑った。

なんだか怪しい病院だな……。

でも、気になって調べてみるうちに、私はいろいろなことを知った。

母親の通う病院の先生たちは、医術はもちろん、話術も磨いているということだった。その背景にはAIの台頭があったのだと、当時の院長のインタビュー記事には書かれていた。

もともと医者には患者を診察して診断を下すという役割があったけれど、その診察のところをAIが担い、膨大なデータと照らし合わせながら高い精度で診察ができるようになりつつあった。これにより、医者の役割は「診察して診断を下す」というものから、「AIによる診察結果を精査して、最終的な診断を下す」というものにシフトしていた。そして、医者はそれまで診察に費やしていた時間を別のことに使えるようになってきていた。

当然ながら、そうは言っても医者が暇になるはずもなく、やるべきことは際限なくあった。けれど、そんな中でも浮いた時間でAIにはできない人間ならではのスキルを磨きたいと考える医者が出はじめた。

人間ならではのスキルとは、いったい何か――。

たどりついた答えのひとつが話術であって、母親の通っていた病院では、安心感のある声やトーン、間やテンポ、雰囲気、表情、仕草などに秀でた医者の育成に力を注いでいた。もともと会話が得意な医者も、理論と実践の両面からさらに学びを深めていける環境を用意しているということだった。

話術をもって、患者のストレスを軽減したり、リラックス状態に導くことへとつなげていく。病は気からというけれど、メンタル面のサポートだけではなく、ひいては免疫力を向上させてさまざまな病の予防につなげていく。

それが病院の目指しているところだった。

一方で、関係者が書いた別の記事では、医者に話術など必要ない、そんな表面的なスキルに意味はない、ただの人気取りに過ぎない、と批判する声も多くあった。また別の記事では、会話が苦手であるために医者を目指すのを辞めたという学生の声も取り上げられていた。

でも、私は一連の経緯を知って、母親の通う病院に対する疑いが晴れるとともに目から鱗が落ちるような思いになった。反対派の意見も理解はしつつも個人的には気にならず、



それどころか、現状を知って医者という職業に憧れを抱くようにさえなっていた。
これまで自分は、医者といえはお堅くて冗談が通じなさそうなイメージが勝手にあった。頭が切れて冷静で、怖そうだという偏見もあった。

でも、なんだか違うみたいだ……。

母親は日に日に健康になり、前よりも明るくなった。それをそばで見ていることで、私はいつそう医者への尊敬を募らせた。

医者になりたい。

ううん……なる！

私は医学部に入るため、猛勉強をしはじめた。

国家試験に合格して研修医になった頃にはAIはますます現場で取り入れられるようになっていて、どの病院も画像診断やカルテ解析などで少なからずその力に頼るようになっていた。

研修制度の一環で、希望者は医術の基礎習得を基本としながら話術を学べるようにもなった。

もちろん、私はその希望者として手を挙げた。

最初にお世話になったのは落語家さんのところだった。正式な弟子ではないものの、師匠の家を間借りして、ほかのお弟子さんたちに交じって朝から晩まで稽古に励んだ。そこで私は、話すときの間やテンポ、表情や仕草、話の組み立て方などの基礎を自分なりに盗ませてもらった。

アナウンサーの方にも弟子入りして、活舌や話の伝え方について教えてもらった。ボイストレーナーの方からは、発声法や自分に合った声づくりについて指導をもらった。

そうして研修期間を無事に終え、いまの私は内科医として勤務している。

診察室で患者さんとやり取りする様子はたから見ると、もしかすると診察とは関係のない無駄話ばかりしているように見えるかもしれない。でも、私は適度に脱線しつつも本筋を外さず、折々にポジティブな言葉や健康に関係のある言葉を紛れこませることを意識している。

患者さんにはそうして安心してもらい、笑ってもらい、楽しんでもらう。その積み重ねで、免疫力の向上につなげて予防を目指し、無意識下からも健康的な生活にアプローチしていく。

医療と話術で健康な社会を実現する。

それが私の役割だ、と思っている。

そんなあるとき、院長から私たちに通達があった。

病院で新しいシステムを導入することにしたという。

院長は言った。

「このたび、ほかの病院に先駆けて、医師の話術をサポートするAIを取り入れることにしました。今後は、患者さんにお話しする内容をAIが組み立ててくれ、その内容をお伝えする声についても患者さんごとに最適に設計された人工音声自動的に流れるようになる予定です。医師はAIの提供する話題などが適切かどうかの判断を瞬時に下し、胸元のスピーカーでAIの人工音声をあたかも自分が話しているように流すことが求められるようになります。このシステムの導入で、いまは個人の努力や才能に左右されてしまっている話術も汎用化され、誰もがより質の高いものを患者さんに提供できるようになることでしょう」

それを聞いて、周囲のみんなはどよめいた。

医師は口パクをしろってことか!?

そんなの、医師がいる意味がますますなくなるんじゃないのか!?

不安視する声が飛び交うなかで、私も最初は戸惑った。

が、少しすると、なんだかワクワクしはじめた。

AIのおかげで、またできることが増えるかもしれない。

とりあえず、俳優さんに弟子入りしようっ!

そんなこんなで、最近の医師には演技力も求められるようになってきている。